

Title	國民の日本史「大和時代」, 西村眞次著
Sub Title	
Author	阿部, 秀助(Abe, Shusuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.143(449)- 143(450)
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0143

書評

國民の日本史「大和時代」(西村眞次著) (早稲田大學出版部發行)

歴史家の任務は或時代に於ける國民が如何に生活し如何に思索せしやを考察するにありきは十九世紀に於ける偉大なる史家ランケが吾人に語る處にして、以上の意義を最も適確に國史研究上に示せるものを本著とす。

本著の第一章は其内容より見れば緒論と見做す可きものにして、所謂地ありて人あり人ありて史ありの立脚地に立ちて、先づ「地」の問題として「地球の生成と其發達」と「日本群島の地勢」を明かにし、次に人の問題として「人類の出現と其進化」及「古代民衆の移動」とを考察し、依りて以て第二章以下に於ける民族生活史の出發點を叙述せり。

我邦に於ける先住民の生活に於て著者が第一に考察せるは舊アイヌ種族にして彼等が移住の動機に就きて著者は次の如く論ぜらる。

「彼等の漂浪は食物の供給を求めたのにも基づいたか、一つは奇しい宗教の煽動に基づいた、彼等は故郷にゐた時から自然を崇拜心を有し、その昇る地平の果てにあくがれてゐた、……がラツカヤからニコリスクの附近を足溜りとしてゐた彼等は、やがて北の方へ移動を始めた、果てしなき日本海の蒼波は彼等の

東方憧憬の心を奪ふことが出來ず、彼等をして朝毎に日の昇る東地を目的にして果てしなき旅に上らしめたのであつた。」(同書六〇―六一頁)

更にエスキモーの足跡が我邦に存せしや否やに就きて著者は「アイヌの説話に従へば、アイヌよりも前に、既に群島に他の民衆が住んでゐたといふことは想像出來る、説話は全く精神上の産物であることもあり、またいくらかの現實が反映せられてゐることもある、従つてコロボツクルは全くの想像的人類とのみも考へられない、故坪井博士はそれを實在の民衆と見做し、それは多分エスキモーのやうな人種であつたらうと想像せられた、私は悉くそれを否定しようとは思はないのみならず、寧ろさう考へるのに理窟がないことにはないと思ふ」(同書一三二―一三三頁)

第三章「原日本人の生活」は主としてツングース民族の物的、精神的考察にして、殊に著者は此民族移動の原因を(一)種族の移動性(二)宗教の推進力(三)生活の支持慾(四)氣候の壓迫力(五)異族の迫害にありとなし、斯くの如き種々の原因が双關的に此民族を動かして北米アシアより其一部を日本群島内に移さしめ茲に日本人の歴史の第一頁を繰り擴げせしめしと云へり。

第四章「南西民族の移住」に於ては著者は小人の傳説・州胡の

記述、倭儒國の説話等によりてネグリト一漂着の事實を肯定し、而して彼等の渡來は大方黒潮によりフリーリツピン群島より臺灣、沖繩諸島等を経て北上し、日本群島の或地點に上陸せしものにして、之れが年代は略ぼツングースの移住と同時に或は多の古き時代に存すとせり。次ぎに苗族は紀元前六世紀の頃、中部支那より海を越へて北進し、日本群島の一端に上陸し、之れが生活の中心地點は九州の西海岸即ち筑後川、菊池川、白川の沖積層にして

其處に彼等は農業的生活を營み稻、麻、桑を作りて生活上の資料を得しものにして、彼等が移住の動機は漢族の壓迫と共に九州方面の活火山にあくがれて來りしものゝ如しとなせり。次ぎに國史上の「隼人」族はインドネツヤ族にして、彼等は平安時代に至る迄日本人と同化することを得ざりしものとなし、尙ほ移動性と忍耐性とに富みし漢族が我邦に歸化せしこゝは秦氏及漢氏の氏名によりて明かなるのみならず、色々の説話によりて之れを知るを得るとなし、而して彼等の移住は恐らく帶方郡と日本群島との往來が頻繁なるに至りし以前のことにして、ツングース族の第三次移住と前後し、之れが移住地は九州の北端、中國の沿岸地方にして、彼等は主として農業、稀れには商業に従事して群島の文化を進めるに與かつて力ありしことは古代國語中に漢語の日本化されしもの極めて多きに徴しても之れを知るを得可しと論ぜり。

第五章「日本帝國の萌芽」の下に著者は先づ「聚落の生成と其發達」を論じて我邦古代の聚落的狀態に及び次で「皇室の勃興」「原始形の國家觀念」「法制思想の透明」を論じ、第六章「社會組織と政治組織」の下に「家族制度の基調」「氏族制度の發達」「政府

の組織」「官房財政から國家財政へ」「土地經濟」「民衆領域の擴大」を叙し、最後に第七章「文化生活の昂揚」の下に「大陽復興文化」「文化移動線と古代交通線」「國家の成立」「移民と新文化」「日本民衆の生活理想」を論じて本著を結了せり。

本著は我邦古代史研究上吾人を啓發せしめし點多く、吾人は他日、再讀三讀の上更に著者の至教を乞はんと欲す。(阿部秀助)

佛蘭西革命史論

(占部百太郎著)
巖松堂書店發行

歴史に於ける進歩發達は、或る見地に於いて人類の解放を意味すると言つていゝ。もちろん舊套を脱したる新狀態は、他の新たな拘束であるかも知れぬ。しかしそこに吾々の欣求する理想實現の過程をみる事ができる。而して歴史上の事件にして、積極的に消極的にか人類の解放に貢獻せざるものはないけれども、殊にこの點において著しいものは、近世紀の初頭に於けるルネサンス、即ち文藝復興と地理的大發見と宗教改革との三大事件である。中世紀の神秘的な、しかも倦怠な精神によつて支配された人類は、文藝復興によつて理性の上の解放を得た。また主として地中海と大西洋の一部に局限されたヨーロッパ人の活動地域が地理的大發見によつて擴大され、全世界がその活動舞臺になることができた。更にローマ法王の不合理な絶對命令に抑壓されたる彼等は、宗教改革によつて心靈の上の解放を得た。かくて近世紀の幕が開かれ、彼等は新舞臺の上に新活動をなしたのである。それ